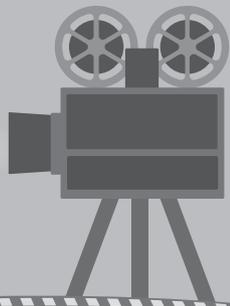


# あしたの君へ



両親が存在し全員が仲良しな家庭が普通とは限らない。自分にとって一番身近な存在であるからこそ、苦しみを抱えている人たちがいる……。

そのような、家庭が関連する事件や家庭の問題に対して、第三者の立場から調査するのが家庭裁判所調査官、通称「家裁調査官」だ。家裁調査官は、問題を抱えた当事者と面接し、背景を調査し、紛争を解決へと導くことが仕事だが、裁判官のように裁くことを目的としているわけではない。相談者たちの立場や周りの状況を考慮して、相談者たちにとってよりよい道を提案するのである。

主人公の望月<sup>もちつき</sup>大地は家裁調査官になるため研習を受けている家裁調査官補だ。大地は研習のために初めて訪れた地でさまざまな事件に関わっていく。事件の当事者たちは、それぞれの立場で多くの問題を抱え込み、心を開かないことが多い。大地はそれぞれの事件に対して日々悩み葛藤し、時には先輩や同僚からの支えを通じて、事件をどう扱うか判断していく。

物語の軸は大地の成長である。研習中最後に経験した事件は離婚による親権争いだった。母親も父親も十歳の息子、悠真<sup>ゆうま</sup>の親権を譲らない。悠真は親の離婚に対して気にしていないようなそぶりを見せているが、大地は悠真の大人びた口ぶりの中に虚勢を感じとった。悠真との話を終え、部屋から出ていこうとすると、悠真は大地を引きとめてこう言う。

「お兄ちゃん——親ってなに」

大地はこの事件の真実にたどりつき、これまでの研習期間中の経験をもとに結論を下す。研習中の事件を通して家裁調査官とは何か、そして「家族」とは何かを自分なりに理解していくのだ。

人間関係の中心にある家族の問題に立ち向かう家裁調査官。大地とともにさまざまな家庭の存在を知りながら、あなたも「家族」とは何かを考えることになるだろう。家族が一番身近であるがゆえに日常ではあまり意識しない存在かもしれない。この本を読んで「家族」について見つめ直してみたいだろうか。

なにかに傷つき、悩み、  
その場に立ち止まって動けずにいる人が、  
半歩でもいいから歩き出せる力になりたい——



『あしたの君へ』  
著者：柚月裕子  
出版：文藝春秋  
価格：1,500円(税別)

